

共通教育はどこへ行く

稲賀 繁美

先日、かつて「一般教育」の時代に受講した学生のひとりから、思わぬ葉書を受け取った。かれには知的障害をもつ姉上があって、そこから逃れるのではなく、そこに一生向き合って生活してゆく決心をした、いま社会福祉士の養成学校に通いながら、障害者の施設で非常勤をしているのだという。葉書によれば、講義のさいに返却したレポートの講評に当方が記したコメントに感激したのだという。そこにはローレンス・ヴァン・デル・ポストの『影の獄にて』を読んでごらん、と記されていた、という。当方はそんなことなど、すっかり忘れていた。いや、時々こうした思わぬ手紙を戴けるから、全学の共通教育は疎かにはできないのだ。

新入生を相手に、4月の授業で必ずこう尋ねることにしている。今なにがしたいか。今年のうち何を実現したいか。大学に何を求めるか。4年（あるいは6年）で卒業するまでになにを成し遂げたいか。そして30までに何をするか。1割の学生が「何かやりたいことを見つけない」、「何かをしたい」、「別に何もしたくない」と答える。3割の学生が「運転免許を取りたい」、「英語検定1級を取りたい」といった資格マニュアル自己目的型の回答をする。「4年間で卒業したい」といったちっぽけな「夢」で満足する「よい子」も多い。「公務員試験に受かるような授業をして欲しい」といった受験浸けの現実的要望も交じる。「ゲームセンターにはまり狂いたい」といった現実逃避願望あたりが、せいぜい悪ぶってみせた見本。「アジアを放浪したい」だの「国境なき医師団に加わりたい」だの、「熱気球で世界一周してみたい」だの、「チベットを徒歩で横断したい」だの、「パリ・ダカールに出場したい」といった豪快な希望は、もはやダサくて時代錯誤らしく、とんとお目にかからない。先生の意図を阿った背伸びした回答など、当方とてもまっぴらだが、「世界各地に友人を作りたい」、なんて答えも、残念ながら、まったくもって帰ってこない。なにが現在の日本の18歳そこそこの若者を、ここまで萎縮させてしまったのか。それに比べれば、冒頭に触れた生物資源学部の卒業生など、むしろしっかりと足

が地についた人生目標を発見できた、何よりのケースだったと思わずにはいられない。

入学後の半年で、人生に対する受け身な待機の姿勢の殻を破ること。続く半年で、何か具体的な達成目標を描き、それを実現する経験を大学の授業の一環として味わってもらうこと。そこいらに「共通教育」の初期目標を絞ってもよいのではないか。パリ・ダカールにはフランス語も必要だろう。またメカの技能とサーヴァイヴァルの知識と実践も不可欠だ。そうした意欲があってはじめて語学の授業や実験科目も意味を持つ。またひとりの能力の限界を越えるためには、目的達成のため有志でチームを作ることも大切だろう。ところがそうした実益や実践、仲間との共同作業といった可能性は、センター試験といったペーパー・テストからは組織的に疎外されている。日本の流儀ですべてがうまくゆき、日本語が通じることが当たり前、とする前提をまず取っ払い、日本に自閉せず、外へと視野を開くきっかけを提供すること。高校までの日本の学校で教え込まれてきた価値観など、とても共有できない人々がこの世に多く存在することに気づいてもらうこと。異文化にすなおに驚く感性と、その文化を支える仕組みを理解しようとする知性、さらには価値観を異にする人々にも共感できる情操を。そして留学生を前にして、構えたり、気後れしたりせずに付き合っけてゆける柔軟性を養ってもらうこと。そんな眼目で、「比較文化」を担当して、これで7年目が終わった。

試行錯誤のなかで得た教訓。授業はナマモノだ。手作りだ。そして真剣勝負だ。新入生の新鮮な頭脳にどういった働きかけができるかが、大学初期教育のみならず、生涯教育の死命を制する。その大切さを知ればこそ、遠方からわざわざ足を運んで下さる、熱心な非常勤の教官もある。他学部の学生相手だから手を抜いた授業をする—といった偏見に基づく中傷ほど、現場の先生を傷つけるものはない。共通教育は全学の教官と学生が皆で取り組む、大切な課題なのだから。

(人文学部・助教授)